

あなたも サンカク! 男女共同参画

国東市男女共同参画審議会（吉田昇子会長12人）は、今年度から5年間を計画期間とする男女共同参画計画（改訂版）及びダイジェスト版の両素案について諮問を受け、審議を重ね、7月13日（金）、三河明史市長へ答申を行いました。答申では、男女共同参画の推進体制の整備や、仕事と家庭生活を両立するための支援策の充実を求めています。

なお、審議会の様子や答申書については、市ホームページをご覧ください。

また、計画（改訂版）につきましては、冊子や市ホームページ、広報などでお知らせします。



吉田会長（右端）と委員の皆さん



くにさき婚活応援団



7月15日（日）、市内独身男性16人、市内外の独身女性15人が参加して“MARINPIA de サマー恋活パーティー”が開催され、4組のカップルが誕生しました。これは、くにさき婚活応援団が企画や参加者募集に取り組んだもので、参加者はマリニピア祭りの催しや夕食パーティーで交流しました。

次回の婚活イベントはクリスマスシーズンに向けて企画中です。また、応援団によるお見合いセッティングも少しずつ出ていますので、独身の方の会員登録をお待ちしています。



夕食パーティーの様子

問い合わせ

人権・同和対策課 男女共同参画係

☎0978-72-0354 FAX 0978-72-0357 E-mail : jinken-dowa@city.kunisaki.lg.jp

市長室から こんにちは

8月
15日
No.16

国東市長
三河 明史

カラスの行水と地獄の鬼

毎日暑いですね。こう暑いと私は風呂に入るのも面倒くさくなり、毎日シャワーで済ませることが多くなります。しかし、昔はシャワーなどというシャレたものではなく、いくら暑くても風呂を沸かして入るしかありませんでした。

私は、子どもの時からカラスの行水が常で「肩まで沈んで100数えろ」など言われるのが大嫌いでした。でも、今年89歳になる父親は、若い時分は、真夏のどんな暑い時でも熱いお風呂に入り、ゆでダコのように赤くなつて風呂から上がり、縁側で越中一つで団扇で涼をとるのが大好きでした。その様子は、祖母や母から「地獄の鬼」と呼ばれていました。その父も年なのでしよう。最近では風呂に入ってもすぐ上がるようになりました。

風呂と言えは、農作業に忙しい祖父や父母に代わって、風呂を沸かすことが子どもの時の私の仕事でした。水の入ったバケツを持つことができるようになると、台所にある井戸から釣瓶で水を汲み上げ、バケツに注ぎ、いっぱいになると風呂まで運んで五右衛門ぶろの風呂桶に入れる。風呂桶に水がいっぱいになるまで運ぶのは子どもにとってなかなか大変な仕事でした。水を満たすと、蓋をして薪に火をつけます。乾燥した小枝や小柴に火をつけるのですが、中々薪に燃えうつらないのです。祖母からよく「あきふみ、頭を使わにや。頭いい人ほど火をつけるのがうまいんじや。」と言われたものです。要領の悪い私は、火をつけるのがとても下手でした。

時代とともに井戸も釣瓶から手押しポンプになり、そして集落の水道になり、重いバケツを運ばなくてもよいようになりました。そして、我が家でもようやく昨年、五右衛門風呂から湯船に直接お湯を注ぐ式になりました。便利にはなりましたが、私のような「カラスの行水」でも五右衛門風呂の方が良いように思います。特に冬は体の中から温まるように思えるのです。

晩秋の頃、風呂の焚口で、ようやく燃え始めた薪の匂いを嗅ぎながら暗くなるまで農作業をしていた祖父や父母の帰りを待っていた日々を思い出します。